

平成23年度前期授業に関するアンケート結果(専門職学位課程)

以下，学内限定公開資料のため添付省略

第2回学校支援プロジェクト連絡会

日 時 平成24年11月30日(金) 10:45～

場 所 中会議室(事務局棟2階)

- 協議事項
- 1 学校支援プロジェクトの進捗状況
 - 2 学校支援プロジェクトセミナーの開催
 - 3 来年度のスケジュール及び手続き
 - 4 その他

配付資料

- No.1 第2回学校支援プロジェクト連絡会席図
- No.2 平成24年度学校支援プロジェクト連絡会名簿
- No.3 平成24年度学校支援プロジェクトチーム一覧
- No.4 平成24年度学校支援プロジェクトセミナーの開催
- No.5 連携協力校決定までのプロセス
- No.6 上越市・妙高市以外の新規連携協力校との連携プロセス

以下、学内限定公開資料のため添付省略

「平成23年度都道府県教育委員会と上越教育大学との情報交換会」における
大学院カリキュラムについての意見聴取結果の分析

担当：志村 喬

1. 調査方法

平成23年12月4日に開催された「平成23年度都道府県教育委員会と上越教育大学との情報交換会」（上越教育大学）において、修了生の動向を踏まえた本学大学院カリキュラムへの意見等を聴取した。なお、参加各教育委員会には、意見聴取する旨の文書を事前に送付しておいた。

2. 聴取意見等の概要

複数の教育委員会（青森県・宮城県）から大学院におけるカリキュラムの充実を評価する意見が得られた。特に、学校支援プロジェクトは評価するとともに（新潟県・新潟市）、同研究成果の現場での還元を期待する声があった（群馬県）。また、特別支援教育の一層の充実（新潟県・岩手県）、防災教育の必要性（宮城県）も聞かれた。

なお、現職教員と非現職者（学卒者）とのニーズや理解の差による課題が、指摘された（埼玉県）。

以下，学内限定公開資料のため添付省略

第3回フォローアップ研修会報告書（抜粋）

現在の私を支えている上越教育大学教職大学院での学び

上越教育大学附属小学校指導教諭 関谷 俊彦（1期生）

修了後の2年間、現在の自分の職務内容と教職大学院で学んだこととの関連について、深く考えたことはありませんでした。そんな私が、第3回フォローアップ研修会でのシンポジウムにおいて発表者となったことをきっかけに、院生時代のどんな学びが現在の自分を支えているのかについて考えました。そのことにより、上越教育大学教職大学院での経験がいかに貴重なものであったのか、以前よりも強く感じるようになりました。このような機会を与えてくださった上越教育大学教職大学院の関係者の皆様に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

シンポジウム当日の発表内容と重なる部分がありますが、今回の発表を機に私が実感していることを以下に述べます。

1 課題解決の根拠を豊富にもつこと

学校では、管理職が各教員の特性を生かした校務分掌を組織します。しかし、常に自分の得意分野を担当するとは限りません。また、ある程度の年齢・職階になると、広い分野のことについて、それなりの見識をもっていなければ、同僚からの信頼は得にくいものです。

教職大学院では、多くの領域について学びます。それだけ、一つ一つの領域について深い知識を身に付けることは難しいといえます。しかし、各領域について、どんな考え方で事にあたるとよいか、何から手を付けるとよいかといった、課題解決に結び付くツールというべきものを得ることができました。

自分の思考の根拠が増え、多面的に物事を判断するようになりました。

2 チームによるPDCAサイクルを実践すること

それぞれの学校にそれぞれの学校課題があります。その課題解決に向けて、何が問題であるのかをとらえた上で解決策を立て、試行錯誤しつつ子どもの状況を見ながらより良い教育活動をつくっていきます。

教職大学院では、それぞれのチームが別々の課題を追究します。しかし、どのチームも課題解決に向けた取組の道筋は先に述べたようなもの、即ち、PDCAサイクルをたどると考えます。課題の領域はどうあれ、チームで教育活動の改善に取り組む際の方途を実践的に身に付けることができました。

個人研究では経験しにくいチームでの実践は、現在の学校での教育活動に生きています。

シンポジウム中の質疑応答の際、「教職大学院の課題は？」との問いに対して、学校支援プロジェクトにおける課題と院生自身の追究したい課題とのミスマッチについて触れました。極論ですが、このミスマッチへの不満は院生の甘えであると思っています。学校教員は、勤務校の学校課題を選べる訳ではありません。いつ、いかなる課題に直面しても、それを協働しながら解決に導く努力をすることが職務です。

大学院の修士課程と異なり、教職大学院のカリキュラムは自分の興味・関心のある分野を鋭角的に追究しにくいものです。しかし、臨床共通科目で広汎な分野の課題解決の方策を探ることや学校支援プロジェクトにおいて連携協力校の実態から把握した学校課題の解決に向けて真摯に努力していくことなどの研究・実践活動こそが、学校現場で求められる教員の資質につながる学びであると感じています。

平成23年度

「教育の成果・効果に関する調査」(現職教員修了予定者対象) 結果の分析 (抜粋)

担当：志村 喬

1. 調査方法

修了予定の現職教員を対象にアンケート用紙を配布し、平成24年1月16日～1月30日までの期間で調査した。

質問は、「本学大学院のカリキュラムは、今日の教育現場で直面する課題に対応するものであったと思いますか、あなたのお考えをお聞かせ下さい。」であり、自由記述で回答を求めた。

全調査対象者75名のうち64名から回答を得た。したがって、回収率は85.3%である。

2. 結果概要

*文中カッコ内のID番号は、添付資料の回答者ID番号である。

(1) 修士課程修了予定者

略

(2) 専門職学位課程修了予定者

対象者41名のうち33名から回答を得た。回収率は80.5%である。

「とても思う。現場経験者にとって直面する課題であったと思う。特に、M1前期の臨床科目はその課題が整理されておりとても興味深く取り組むことができた。支援プロジェクトの支援校の課題に対して、臨床で学んだことが活かせる工夫があるとよりよい支援になると考える。」(ID37)との回答をはじめ、肯定的な意見がほとんどである。したがって、カリキュラムは概ね評価されており、とりわけ臨床共通科目の評価は高い。なお、同回答の後段で指摘された学校支援プロジェクトについては、「学校支援プロジェクトは、今日の教育現場の課題解決を目指すものであり、その意義はあると思います。しかし、その目的を念頭に活動が展開されているかということと必ずしもそうではないように感じます。」(ID40)のような課題を指摘する回答が目立つ。

また、「今日の教育現場で直面する課題に対応するものであったとは思いますが、専門職学位課程においては、教育現場に即したものであるにもかかわらず、研究の要素も必要で苦労しました。そうであれば、カリキュラムの中に、最低限研究に関する授業もあるとありがたいと思います。」(ID33)、「特に学級経営、生徒指導等の学びは、学部生のときはあまり学んだことがなかったのでよかった。ただ、教科指導の専門性に関しては、カリキュラムの中で少ないように感じる。」(ID32)、「教職大学院では、教育現場の課題には即応していると思うが、教科や領域について十分に学ぶ科目がない。」(ID60)、「実技教科の教授を増員し、学びの専門性を広げる。小学校の内容の講義が多いため、中学、高校の現場にも対応した講義を設定する。」(ID36)のように、研究的側面や、教科・領域の専門的学習の充実を求める回答が複数みられた。

(3) まとめ

「直面する課題」の捉え方や大学院での研究目的は回答者により異なるが、ほとんどの修了予定者にとって、課題に対応するカリキュラムであったと評価されていると思われる。なお、非現職者とともに学ぶことの長所・短所への言及は専門職学位課程でも複数みられ、両課程で共通している。

以下、参考資料（添付）

略